

岡山県委託事業「死生学とアドバンスケアプランニングを取り入れた要介護高齢者の尊厳を最期まで守る多職種連携口腔栄養関連サービスの推進事業」第11回公開セミナー

食べること、生きること

日時：令和2年1月12日（日） 9:30-15:30

会場：岡山大学歯学部棟（岡山市北区鹿田町2-5-1）

プログラム

学術講演会

9:30- 9:35

開会挨拶

窪木 拓男

岡山大学病院クラウンブリッジ補綴科 教授

9:35-10:35

特別講演1

座長：窪木拓男先生（岡山大学病院クラウンブリッジ補綴科 教授）

「食べる楽しみを支える在宅医療」

中村 幸伸 先生

つばさクリニック 理事長，岡山大学医学部 臨床教授

10:35-11:35

特別講演2

座長：日笠晴香先生（岡山大学大学院ヘルスシステム統合科学研究科 講師）

「いのちの源としての口腔を護る」

石垣 靖子 先生

北海道医療大学 名誉教授

11:35-12:35

特別講演3

座長：坂本八千代先生（くらしき作陽大学 食文化学部栄養学科 専任教授）

「人生の総仕上げに立ち会う～達成感のある看取りへの手助け～」

菊谷 武 先生

日本歯科大学口腔リハビリテーション多摩クリニック 院長

12:35-13:25

昼食会議（ワークショップ参加者）

ワークショップ（事前登録制：定員30名程度）

13:30-15:30

ミールラウンド

コーディネーター

菊谷 武 先生（日本歯科大学口腔リハビリテーション多摩クリニック 院長）

症例提示

戸原 雄 先生（日本歯科大学口腔リハビリテーション多摩クリニック 医長）

ファシリテーター（50音順）

坂本 八千代 先生（岡山県栄養士会 会長，くらしき作陽大学食文化学部 専任教授）

佐川 敬一郎 先生（日本歯科大学附属病院口腔リハビリテーション科 助教）

田代 晴基 先生（日本歯科大学附属病院口腔リハビリテーション科 臨床講師）

中村 幸伸 先生（つばさクリニック 理事長，岡山大学医学部 臨床教授）

日笠 晴香 先生（岡山大学大学院ヘルスシステム統合科学研究科 講師）

渡邊 和子 先生（くらしき作陽大学食文化学部 准教授，日本在宅栄養管理学会 理事）

15:30

閉会挨拶

窪木 拓男

岡山大学病院クラウンブリッジ補綴科 教授

ご挨拶

岡山大学病院 クラウンブリッジ補綴科

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 インプラント再生補綴学分野

窪木 拓男



「死生学とアドバンスケアプランニングを取り入れた要介護高齢者の尊厳を最期まで守る多職種連携口腔栄養関連サービスの推進事業」第11回セミナーの開催にあたり、事業責任者として一言ご挨拶を申し上げます。

要介護高齢者が住み慣れた地域で最期まで生き生きと暮らし続けるためには、自分の口から食べ続けることが重要な要件となります。いつまでも口から食べるためには、正しい評価に基づく摂食嚥下機能の維持向上を目指すばかりでなく、本人の機能に合った形態をもつ食事の提供や食内容の変更によって、安全かつ低栄養の予防を目的としたアプローチが必須となります。すなわち、咀嚼機能をはじめとする摂食嚥下機能の評価や食事指導において、医師・歯科医師と栄養関連職種との連携は欠かせません。

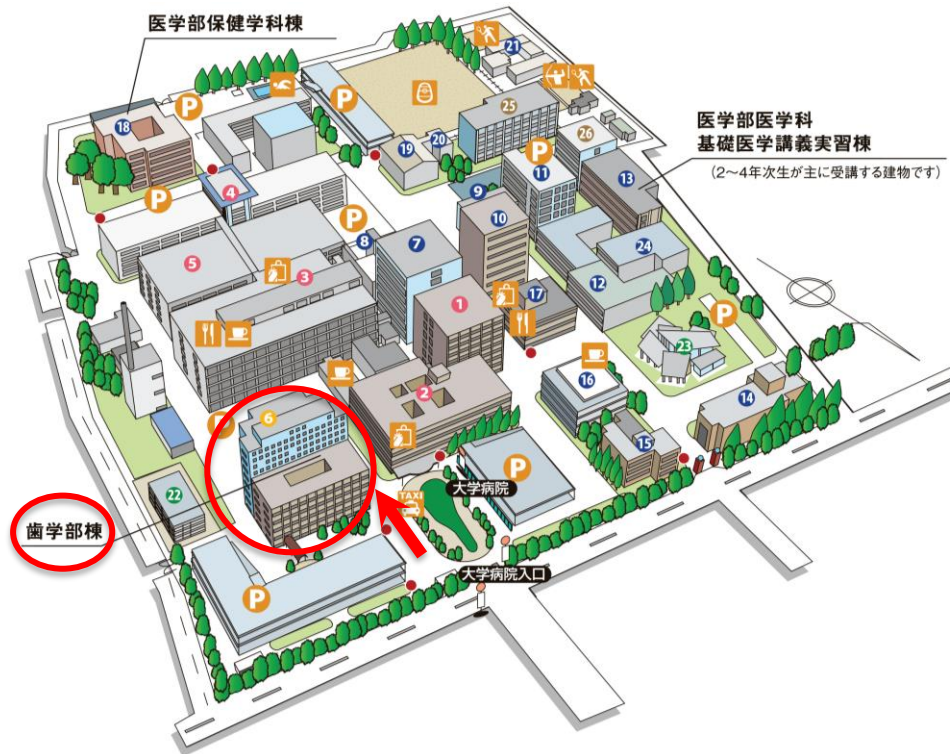
そこで、病院、介護保険施設、在宅における医科、歯科と栄養関連職種、口腔リハビリ関連職種の連携を行う上で必要な知識や技術、態度を教育する実務者養成セミナー「要介護高齢者の低栄養を防ぐための医師・歯科医師と管理栄養士による口腔栄養関連サービス推進事業」を、平成27年度から4年間岡山大学病院と地域医療圏の医師会、歯科医師会、栄養士会等が中心になって実施いたしました。その実績を評価いただき、令和元年度より引き続き岡山県からサポートいただけることになりました。セミナーの内容も会を重ねる毎に充実し、非常に優れた顔の見える多職種連携生涯教育の場を提供しています。中でも、ワークショップの人気は高く、複数回参加したいという方もどんどん増加していることは喜ばしいことと感じています。今回は、多職種連携で地域を支えていくための心構えをお話しいただくため、つばさクリニック理事長 中村幸伸医師、ホスピスケアの先駆者としてご高名な北海道医療大学の石垣靖子名誉教授、「口腔栄養関連サービス」の介護診療報酬導入を主導された日本歯科大学の菊谷 武教授にいらして頂き、充実した講演会を企画することができました。

本セミナーの開催にあたり、岡山県保健福祉部健康推進課、岡山県歯科医師会関係者の方々をはじめ多くの方々のご尽力を賜ったこと、心から御礼申し上げます。本セミナーが、地域の高齢者医療や介護、福祉に多大なる貢献をできますことを祈念して、ご挨拶に代えさせていただきます。

会場案内図

会場：岡山大学歯学部棟 4 階（岡山市北区鹿田町 2-5-1）

鹿田キャンパスマップ



歯学部棟 4 階



食べる楽しみを支える在宅医療

中村 幸伸 先生

つばさクリニック 理事長, 岡山大学医学部 臨床教授



当院は 2009 年 4 月に在宅医療に特化したクリニックとして開院し、現在は岡山市・倉敷市に於いて常勤医 8 名体制で約 600 名の患者に対して 24 時間 365 日の診療対応を行っています。昨今、在宅医療の重要性が強調され訪問診療を積極的に行う診療所が増えてきたこともあり、自宅で過ごしたい方が在宅医療を受けやすい状況になりつつあります。様々な医療処置を要する重症者や自宅でターミナルケアを行う患者、老老介護、認認介護の方などが増えてくる中で、「病気や障がいがあっても頑張って在宅で過ごす」段階から、「せっかく在宅にいるのだからよりよい生活を目指す」段階に移ってきていると思います。それに伴い、徐々に食に対する相談も増えてきました。

今回は在宅医療の現状をお話するのに加えて、私が経験した症例をもとに、在宅の現場でどのように食を考え、支援していくのがよいのか一緒に考えていく機会になればと思います。

略歴

2002年 鳥取大学医学部医学科 卒業
2002年 財団法人倉敷中央病院（教育研修部，循環器内科）
2007年 三育会新宿ヒロクリニック
2009年 つばさクリニック 開設
2011年 医療法人つばさ 理事長
2014年 つばさクリニック岡山 開設

開業当初より、高齢者から小児までの在宅患者様に訪問診療を行っております。

2017年7月より、在宅NST チームを立ち上げ、在宅患者様の食支援にも積極的に取り組んでおります。

資格等：

認定内科医，日本循環器学会専門医，在宅医学会専門医・指導医

岡山大学医学部臨床教授

緩和ケアフォーラム in 岡山 世話人

倉敷NST 研究会 世話人 他

いのちの源としての口腔を護る

石垣 靖子 先生

北海道医療大学 名誉教授



超高齢社会を迎えた今、受療者の8割は、加齢に伴う心身の障害を持つ人たち、がんをはじめとする生活習慣病、精神障害を含む障害者、そして難病の人たちと言われている。これらの人たちは“生活（くらし）の営み”を整えることが即治療につながる対象である。すなわち、生活の営みを整えることが本質的な役割であるナースの役割は大きいと言える。「患者の口腔内の状態は看護の質を最もよく現すものである」と V. Henderson が述べているが、患者がどのような状況にあっても、良い口腔環境を維持するためナースの責任は大きい。

長年緩和ケアに携わってきたが、WHO によると緩和ケアの最終目標は「患者とその家族にとって良好な Quality of Life (QOL) を実現することである」と述べている。QOL とは本来抽象的、主観的な概念だが、清水は医学的 QOL の評価について次のように述べている。「ある人の身体環境が、その人の人生のチャンスないし可能性（選択の幅）をどれほど広げているか、（言い換えれば、どれほど自由にしているか）である。」（清水哲郎：医療現場に臨む哲学・1997）すなわち医学的 QOL は環境の評価である。口腔の健康に貢献する専門職の役割は、「口腔」という環境を最もよい状態に維持することであり、その責任は大きい。なぜなら、口腔はいのちの源だからだ。すなわち、まず飲食に伴う消化器としての諸機能、呼吸器の役割、有形・無形のコミュニケーション機能、そして、生体防御など生命の根源に関わる機能を担っているからだ。

臨床にいたころ、がん治療によるさまざまな口腔のトラブルや、病状の進行に伴って起きやすい口腔の機能低下に対して多職種でチームをつくり工夫を重ねてきた。それは、患者に対して「これ以上することはない」を禁句にした挑戦だった。例えば、口腔カンジダ症に対するファンギゾン・シャーベット、口渇には試行錯誤を重ねて作ったクランベリー・グミ、口内炎にはトランサミン含嗽水等々を開発してきたが、専門職としてワクワクする挑戦でもあった。

また、頭頸部腫瘍術後や口腔疾患、がんの進行によるボディイメージの変化は、自尊の感情に大きく影響するものであり、個別の状態に対応するアピランス・ケアは患者の尊厳を維持する大切なケアでもある。そして、超高齢者が増加する中で高齢に伴って唾液の分泌の減少、咀嚼する力の低下、嚥下能力の変化などによるトラブルには、口腔機能向上にむけたプログラムも開発されている。健康長寿に向けて、それぞれの専門職が有機的なチーム医療の下に、口腔の健康に貢献する役割を果たしていきたいものだ。

略歴

北海道大学医学部付属看護学校卒業 北海道大学医学部付属病院
北海道大学医学部付属看護学校（教務主任）、北海道大学医学部附属病院副看護部長を経て

1986年 医療法人東札幌病院看護部長
1987年 同院 理事 副院長（看護職として日本初）・看護部長
2002年 北海道医療大学大学院 看護福祉学研究科教授（2008年まで兼任）
2008年3月 東札幌病院退職
2012年3月 北海道医療大学大学院看護福祉学研究科退職
4月 同大学 客員教授 ～2016年3月
2016年4月 同大学 名誉教授

◆主な著書

「癌患者の症状のコントロール」（共）医学書院，1991年
「人間の痛み」（共）風人社，1992年
「がんの痛み心の痛み」家の光出版社，1993
「共感的看護」（共）医学書院 1993年
「Japanese perspectives of end of life care」
Oxford Textbook of Palliative Nursing, 742-746,
Oxford University Press（共）2001
「ホスピスのこころー最期まで人間らしく生きるためにー」大和書房，2004年
「家族を看とるとき」（共）春秋社，2005年
「目指せ！看護師副院長」（共）武 弘道編著 日総研，2008年
「19歳の君へー一人が生き、死ぬということー」（共）春秋社，2008年
「新人看護職員研修の手引き」（共）日本看護協会出版会，2011年
「臨床倫理ベーシックレッスン」（共）日本看護協会出版会，2012年
「看取るあなたへ」（共）河出書房，2017年
「やさしさに包まれて」石垣靖子講和集 CD12巻 ユーキャン 他多数

◆受賞歴・役職

1992年度 エイボン女性大賞受賞
平成24年度 日本がん看護学会 学会賞
1997年 第12回日本がん看護学会学術集会会長
2005年 第31回日本看護研究学会学術集会会長

2006年厚生労働省 看護基礎教育の充実に関する検討会委員（2007年3月まで）
2007年厚生労働省 看護の質の向上と確保に関する検討会委員（2008年2月まで）
2008年厚生労働省 新人看護職員に関する検討会委員（座長）（2011年3月まで）
2013年同上 新人看護職員研修の見直しに関する検討会（座長）（2014年2月まで）
2007年財団法人 笹川医学医療研究財団 理事（2011年10月まで）
2011年11月公益法人笹川記念保健協力財団評議員
NOP法人「市民と共に創るホスピスケアの会」代表理事
公立大学法人札幌市立大学 教育研究委員
名寄市立大学 非常勤講師
北海道医療大学認定看護師教育課程 運営委員
一般社団法人北・ほっかいどう総合カウンセリング支援センター 顧問
旭川訪問看護ステーションモモ 顧問
日本看護管理学会監事

人生の総仕上げに立ち会う ～達成感のある看取りへの手助け～

菊谷 武 先生

日本歯科大学 教授

口腔リハビリテーション多摩クリニック 院長

大学院生命歯学研究科 臨床口腔機能学



食べることはかけがえのない喜びであると同時に、生きるために必要な行為です。この世に生を受けてから、成長のため、活動のために必要なエネルギーやたんぱく質を栄養として得るために、亡くなるまで、食べ続けることとなります。しかし、生きるためのすべての栄養を口から取れなくなったとき、その人に死がやってくるわけです。最近では、口からではなく、点滴やチューブからとることもできるようになりました。しかし、長い人類の歴史の中でこのようなことを始めたのは、最近のことで、有史以来、人は食べられないことイコール死であったわけです。

「食べることは生きること」という言葉をよく耳にします。なぜならば、食べないことは死を意味することだからです。ただし、この「生きる」という言葉が、単に生物学的な生命を表しているだけでなく、その人の人生であったり、生活であったりする意味を含んでいる言葉であることは、言うまでもありません。ですので、どんな状況になっても、食べることはその人の尊厳を守り、家族の喜びにつながるのです。

その時が近づいてくると多くのひとは、やせてきたり、肺炎を起こしたりしてきます。その時に、病院にかかると、肺炎にならないために食べることをあきらめて経管栄養にすることを提案される場合があります。経管栄養にすると、栄養状態は改善しますし、食事の誤嚥のリスクもなくなるので、肺炎を起こすリスクも減るかもしれません。ただ、口から食べられなくなるといったことは、残念であることに違いありません。これらの提案は、いま、低栄養である。いま、肺炎を起こしているという結果に基づいて下されるのが実情です。しかしこの結果は、傾きを考慮せずに行った結果かもしれません。まだまだ工夫の余地があるのに、うまくできていなかっただけかもしれません。「万策尽きたのか？」今一度、できることがないか検討するのもよいと思います。

最後まで食べたという記憶は、残された家族に良い思い出として、残り続けます。この記憶は、死後における悲嘆からの回復を助けます。一方で、なぜ、食べてはいけなかったのか、他に方法はなかったのかといった思いがあるまま、送ってしまった場合には、悲嘆からの回復の妨げになります。人生の最終段階における食べることの支援は、達成感のある看取りへの手助けになるといえます。私たちは、その方の人生の総仕上げに立ち会うことになるのです。

略歴

1988年 日本歯科大学歯学部卒業
2001年10月 日本歯科大学附属病院 口腔介護・リハビリテーションセンター センター長
2005年4月 日本歯科大学 助教授
2010年4月 日本歯科大学 教授
2010年6月 日本歯科大学大学院 生命歯学研究科臨床口腔機能学 教授
2012年1月 東京医科大学 兼任教授
2012年10月 日本歯科大学 口腔リハビリテーション多摩クリニック 院長

東京医科大学兼任教授、広島大学客員教授、岡山大学非常勤講師、北海道大学非常勤講師、
日本大学松戸歯学部非常勤講師

著書：

『ミールラウンド&カンファレンス』医歯薬出版
『チェサイドオーラルフレイルの診かた』医歯薬出版
『あなたの老いは舌から始まるー今日からできる口の中のケアのすべて』NHK出版
『お口、弱っていませんか？嚙みにくい・食べにくい歯科医院で相談できます
患者さんのためのオーラルフレイルと口腔機能低下症の本』医歯薬出版
『絵で見てわかるー認知症「食事の困った！」に答えます』女子栄養大学出版
『絵で見てわかるー入れ歯のお悩み解決』女子栄養大学出版
『食べる介護がまるごとわかる本』メディカ出版
『高齢者の口腔機能評価 NAVI』医歯薬出版
『基礎から学ぶ口腔ケア』学研
『図解 介護のための口腔ケア』講談社

ミールラウンド

コーディネーター：菊谷 武 先生

日本歯科大学 教授

口腔リハビリテーション多摩クリニック 院長

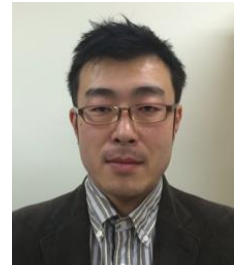
大学院生命歯学研究科 臨床口腔機能学



確かに、ひとは、食べないと死んでしまいます。しかし、死が近いから食べないのだと考えると違った世界が見えてきます。死なないために、頑張って食べてもらう。頑張っても十分な栄養が摂れないときは経管栄養で補充する。こんな考えがこれまでの考えでした。傾きを受け入れ、死が近いということも受け入れることができれば、無理しない範囲で、「食べられるだけ食べる」ことが可能になります。もちろん、食べられない量だけ、体重は減りますし、食べられないという結果は、その分だけ死に近づくことになります。しかし、人生の最終段階において食べることを強要されたり、勝手におなかの中に栄養を注入されたりすることは、本当に本人が望んでいる姿なのか今一度考えてみるのもよいでしょう。このワークショップでは、それぞれの職種やそれぞれの立場の人たちが集い、様々な意見を持ち寄り、ディスカッションできればと思っています。

症例提示：戸原 雄 先生

日本歯科大学 口腔リハビリテーション多摩クリニック 医長



略歴

2005年 日本歯科大学歯学部 卒業
2006年 日本歯科大学附属病院 総合診療科 入局
2007年 日本歯科大学附属病院 口腔介護リハビリテーションセンター併任
2011年 東京医科大学 耳鼻咽喉科頭頸部外科 非常勤助教
2011年 日本歯科大学口腔リハビリテーション多摩クリニック 非常勤歯科医師
2014年 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 博士課程 修了
2014年 日本歯科大学附属病院 口腔リハビリテーション科 助教
2017年 日本歯科大学附属病院 口腔リハビリテーション科 講師
2017年 日本歯科大学新潟病院 訪問歯科口腔ケア科 (人事交流)
2018年 日本歯科大学口腔リハビリテーション多摩クリニック 医長

資格等：

2010年 TNT 取得
2013年 日本老年歯科学会認定医 同年同学会専門医取得
2016年 日本老年歯科学会 摂食機能療法専門歯科医師取得

◆◆◆◆メッセージ◆◆◆◆

食べることは生きるために必要な栄養を摂ることです。その一方人間の根元的な楽しみ、コミュニケーションなど、栄養摂取以外の大切な側面もあります。今回のワークショップでは皆さんと食べることについて学んで行きたいと思います。宜しくお願い致します。

ファシリテーター

坂本 八千代 Yachiyo Sakamoto

岡山県栄養士会 会長
くらしき作陽大学食文化学部栄養学科 専任教授



略歴

ノートルダム清心女子大学家政学部食品栄養学科 卒業
岡山中央病院給食部、岡山西大寺病院栄養科を経て、岡山大学病院臨床栄養部 管理栄養士
2015年4月 定年後再雇用
2016年6月 公益社団法人岡山県栄養士会 副会長
2017年3月まで
ノートルダム清心女子大学人間生活学部食品栄養学科 非常勤講師兼務
2017年4月 くらしき作陽大学食文化学部栄養学科 専任教授
2018年6月 公益社団法人岡山県栄養士会 会長

所属学会:

日本病態栄養学会: 学術評議員
日本静脈経腸栄養学会: 代議員、学術評議員
在宅栄養 HEQ 研究会 他

表彰: 2015年6月 栄養指導において厚生労働大臣表彰受賞

資格等:

管理栄養士 糖尿病療養指導士 認定病態栄養専門師
NST 専門療法士 NST コーディネーター

*****メッセージ*****

一緒に食べるだけでなく、美味しく食べることを考えましょう。楽しみにしています。

佐川 敬一郎 Keiichiro Sagawa

日本歯科大学附属病院
口腔リハビリテーション科 助教



略歴

2012年3月 日本歯科大学生命歯学部 卒業
2013年4月 日本歯科大学大学院生命歯学研究科 入学
臨床口腔機能学専攻
2016年3月 日本歯科大学大学院生命歯学研究科 修了
2016年4月 日本歯科大学附属病院 非常勤歯科医師
2017年4月 日本歯科大学附属病院 助教

資格:

摂食嚥下リハビリテーション学会 認定士
日本老年歯科医学会 認定医
日本障害者歯科学会 認定医

*****メッセージ*****

日本歯科大学口腔リハビリテーション多摩クリニックの佐川と申します。地域における食支援を推進する取り組みに参加させて頂き、大変光栄に思います。よろしくお願致します。

田代 晴基 Haruki Tashiro

日本歯科大学附属病院
口腔リハビリテーション科 臨床講師



略歴

2007年3月 日本歯科大学生命歯学部 卒業
2007年4月 日本歯科大学附属病院 歯科医師臨床研修医
2008年4月 日本歯科大学附属病院 総合診療科入局
(口腔リハビリテーション科所属)
2012年10月 日本歯科大学 口腔リハビリテーション多摩クリニック勤務
2015年4月 日本歯科大学附属病院 口腔リハビリテーション科 臨床助手
2017年4月 日本歯科大学附属病院 口腔リハビリテーション科 臨床講師
船橋市かざぐるま休日急患・特殊歯科診療所
2018年3月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 修了

資格:

日本老年歯科医学会 認定医・専門医

*****メッセージ*****

摂食機能障害を持った方が最後まで安全に経口摂取を続けるために、微力ながらサポートさせていただいております。普段行っているミールラウンドの一場面を少しでもお伝えできたら幸いです。

中村 幸伸 Yukinobu Nakamura

つばさクリニック 理事長
岡山大学医学部 臨床教授



略歴

5頁

*****メッセージ*****

「いつまでも食べたい」住み慣れた環境で過ごす患者・家族を支える現場でどのように病診連携・多職種連携を行い、患者の希望に沿っていかか考えてみましょう。

日笠 晴香 Haruka Hikasa

岡山大学大学院ヘルスシステム統合科学研究科 講師



略歴

2004年 岡山大学文学部 卒業
2006年 東北大学大学院文学研究科博士課程前期
2年の課程 修了
2012年 東北大学大学院文学研究科博士課程後期
3年の課程 単位取得退学
2013年 学位取得(東北大学) 博士(文学)
2014年 日本学術振興会特別研究員
2018年 岡山大学大学院ヘルスシステム統合科学研究科 講師
現在に至る

*****メッセージ*****

最期までよく生きるために、「食べること」について考えるのはとても重要なことだと思います。「食べること」は単に身体だけでなく、くらしや生き方にも関係します。みなさまと一緒に考え学ばせていただきたいと思いますので、どうぞよろしくお願い致します。

渡邊 和子 Kazuko Watanabe

くらしき作陽大学食文化学部現代食文化学科 准教授
日本在宅栄養管理学会 理事



略歴

医療法人玉島中央病院勤務
現在 くらしき作陽大学食文化学部勤務

資格:

管理栄養士
日本糖尿病療養指導士
在宅訪問管理栄養士
日本病態栄養学会評議員・日本在宅栄養管理学会関西中国四国ブロック長

*****メッセージ*****

要介護の高齢者が生涯在宅での生活ができるように、それを可能にするために、それぞれの専門職からの見方、考え方、意見を交えることで総合的な判断が出来るようになります。しっかりディスカッションをして力をつけていきましょう。

Notes